

エッセイ 台湾研究を始めるということ

台湾新文学運動から台湾文学まで

松永 正義

天の時、地の利、人の和ということがあるが、わたしはそれに恵まれていたと思う。まず人の和から。

1968年大学に入って中国語クラスを選択し、そこで若林正文君、宇野利玄君と出会った。若林君とはクラスは別だったが、三千人ほどの新入生の中で中国語を選択したものは五十数名という時代だったし、中国語クラスは伝統的にクラス活動の盛んなところだったのと、大学闘争の時代でいろいろな形での会合も多かったから、知り合うのにそんなには時間がかからなかった。その若林君が70年の終わりか、71年の春頃か（68年から69年にかけて全学ストライキだった影響で三年への進学が半年遅れて、70年の秋だったから、専門課程へ進学してそろそろ自分の研究テーマを決めようかというタイミングだったのだろう）、台湾研究をやらなければならないと言い出して、中国語の授業の担当だった矢吹晋さんに相談したらしい。矢吹さんはまだアジア経済研究所におられたところで、それなら同僚の戴國輝に会わなければいけないということになった。そして若林君が二度目に戴さんに会いにアジ研へ行くとき、わたしと宇野君を誘ってくれて、はじめて戴さんと会った。戴さんは初対面のわたしに呉濁流の二冊の貴重な小冊子（『夜明け前の台湾』1947年、『ポツダム科長』1948年）と、ご自分のコピーカードを渡されて、全巻コピーして持って帰るように言われた。またご自分の主催される研究会にも呼んでいただいた。この研究会で春山明哲君、河原功君、森久夫君、金子文夫君、松田（金子）はるひさん、林正子さん、栗原純君などと知り合った。

戴さんは66年に博士の学位を取得、67年にアジ研の正規の研究員になり身分の安定を得られたころから、本格的に台湾研究に取り組まれるようになったのだろう。もちろん戴さんの博士論文は「中国に於ける甘蔗糖業の発展過程」で、ずっと台湾研究をしておられたわけだが、この頃からより広く歴史研究あるいは「台湾研究」そのものをターゲットとされるようになったのだろう。研究会もはじめは尾崎秀樹なども顔を出す会だったというが、これを東寧会と名付けて本格的な研究会として運営していこうとされていたその矢先にわたしたちが現れたわけで、戴さんのほうでもやや期待されるところがあったのかもしれない。研究会の常連メンバーは、『民俗台湾』の編集発行者で、戦後は平凡社におられた池田敏雄さん、日本人として戦後はじめて霧社に入り、そのルポルタージュを書かれた中村ふじゑさん、アジ研におられた矢吹晋さん、小島麗逸さん、東京大学東洋文化研究所におられた加藤祐三さんなどで、彼らのあいだで交わされる議論は、圧巻だった。わたしはそこで多くのものを見かた、言いかたを学んだように思う。もっともそれらの議論を理解するためには、わたしたちの素養は圧倒的に足りなかったもので、若林、春山、宇野、

河原などの若手で東寧会に参加するための勉強会を作り、毎週本郷の喫茶店で報告と議論を繰り返した。後に台湾近現代史研究会となるこの東寧会とその若手グループとが、いわば「わたしの大学」だった。

わたしたちが東寧会に参加し始めてすぐ、戴さんは最初の一般的著作『日本人との対話』（社会思想社、1971年）。ただしその前に博士論文である『中国甘蔗糖業の展開』アジア経済研究所、1967年）を出版された。なかの「日本統治と台湾知識人——某助教授の死と再出発の苦しみ——」には感動した。植民地支配を考える上での原点を提示する好個の文章で、戴さんの出発点と言ってよいかもしれない。戴さんはまたこのころ呉濁流の著作の出版に尽力されていて、それは呉濁流「無花果」の雑誌『中国』への連載（六五号～六九号、1969年4月～8月）や、呉濁流『夜明け前の台湾』（社会思想社、1972年）、同『泥濘に生きる』（社会思想社、1972年）、同『アジアの孤児』（新人物往来社、1973年）として結実した。こうして戴さんは日本の言論界に対して「台湾」を啓蒙するという位置を確立していかれたわけで、それは学者としての戴さんにとってプラスの面もマイナスの面もあっただろうが、しかし日本の言論界にとっては、「台湾」という問題は思想のひとつの独自の領域であるということ認識する過程となったわけで、それは戴さんにしかできないことだったと思う。

わたしにとってもうひとつ大きな転機となったのは、「台湾現代小説選」の翻訳に参加したことだった。これはもともと田中宏さんが福田桂二氏との共訳で黄春明『さよなら・再見』（めこん、1979年）を出されてから、さらに翻訳を続けたいということで中村ふじゑさんに協力を求められ、中村さんが呼びかけて井口晃さん、大石しげ子さん、若林君、林正子さん、陳正醒君、岡崎郁子さんなどが集まり、翻訳すべき作品の選定のために読書会が中村さんの家で行われた。中村さんの人間関係が核になって、陳正醒君が議論をリードし、井口さんがチェックを入れる、といった会だったと思う。日本時代の研究から始めたわたしが、同時代の台湾文学を読むようになったのは、この会が契機だった。

つぎに地の利ということだが、台湾の70年代はまだ言論統制の厳しい時代で、台湾の中では書けない、あるいは書きにくいことが、香港で活字になるということがあった。郷土文学論争の資料集がまず出されたのは香港であり（馮偉才編『従現代主義到現実主義——当前台湾郷土文学論戦論文集』一山書屋、1978年）、陳映真の作品集が最初にまとめられたのも香港だった（劉紹銘編『陳映真選集』一山書屋、1972年）。また『七十年代』という雑誌にも時々台湾関係の記事や小説が載った。この雑誌は面白い雑誌で、中国の正確な内部情報が載るということで一時チャイナウォッチャーがよく読んでいたものだが、60年代までの香港言論界は共産党系か国民党系かに二分されていたのが、この雑誌は共産党でも国民党でもない左派というスタンスをとっていたところがユニークに感じられた。それは「大陸」でも「台湾」でもない「香港」という場を作ろうとすることであり、いわば「香港」というアイデンティティーが自覚化されていくプロセスでもあるようにも見えた。そしていま思えばそれは香港だけのことではなく、東南アジアの華人社会でも現地化の動きが顕在化しつつあった。戴國輝さんふうにいえば、「落葉帰根」（祖国を離れてもやがては祖国の根に帰る）から「落地生根」（祖国を離れて現地に根を下ろす）への動き

である。いわば国家としての中国と社会、文化における中国性の分離である。それは55年のバンドン会議でのアジアはひとつというところから、独立達成後の近代国家建設のそれぞれの場でどう対応するかという、いわば多元的なアジアへのプロセスであり、また国共の対立という冷戦構造の枠組みでは解けない新しい枠組み、新しい場の形成でもあったと思う。そうした新しい場のありかたが、台湾での言論弾圧を回避する場を提供したようにも見える。いま手元にある七十年代雑誌社出版の本を紹介すると、璧華編選『「七十年代」文学作品選』（七十年代雑誌社、1977年）に採録されているのは台湾、大陸、アメリカ留学生、ニュージーランド華人社会その他から寄せられたものだ。また芝加哥「釣魚台快訊」編『釣運以来台湾的青年人』（七十年代雑誌社、1975年）は、アメリカでの釣魚台運動や、台湾大学での社団活動の当事者の記録として貴重なものだ。内容はともあれこの時期にこのようなものが出版されていたことは、注意されていいことだと思う。

わたしの読書遍歴をふり返ってみると、王拓、李喬、宋沢来、施明正らがいわば一作ごとに言論の幅を広げ、文学の領域を拡大していったのを追いかけて、同じ時期に中国の新時期文学の劉心武や劉賓雁のものを読んで、ここまで書けるようになったのかと、感心していた。そしてこれらの文学を理解する参照系となったのが、韓国の民主化運動の中で書かれた金芝河や黃哲暎の文学だった。また日本文学に即していえば、在日朝鮮人の文学があった。60年代後半から70年代にかけて、在日の社会の中で「朝鮮」から「在日」へのアイデンティティの移行があり、それはまた朝鮮民主主義人民共和国でも大韓民国でもない「在日」という立場の形成でもあったわけだが、その中で朝鮮語で書くのか、日本語で書くのかという議論がさかんに行われた。日本語と朝鮮語の狭間で日本語で書くことの意味を問い詰めようとした金時鐘の文章や、日本語で書くことで日本語を異化し、既成の日本語とは異なる意味での日本語を目指そうとした金石範の議論は、いわば多元的なアジアへの回路を日本語で考えるための格好の入り口であるように思われた。だがこうした方向について考えるためには、まずそれぞれの地域の事情がそれぞれの地域の固有の論理に従って理解されることが前提となる。そのための入口として、日本、台湾、中国をそれぞれの固有の論理に従って考え、その三者を等距離に置いて比較することは、格好のエクササイズであるように思われた。

わたしの中国入門はご多分にもれず竹内好だったわけだが、竹内好が生涯かけて主張したことは、西欧ではなく中国を参照系として日本を考えるということだった。いまわたしたちは日本を考えるための参照系に台湾を加えることができるし、台湾を参照系として中国を考え、中国を参照系として台湾を考えることができる。日本という場所はそのための格好の地点だと思う。

最後に天の時。わたしは台湾新文学運動の研究から研究の道に入ったのだが、それは日本の植民地支配について考えたかったからだと思う。戴國輝さんの植民地論には二つの視点があって、ひとつは政治の弾圧でも経済の搾取でもなく、人間の破壊そのものが植民地支配の最大の問題だとする視点、もうひとつは植民地支配への批判の中に被植民者の側の自己批判をふくめようとする視点だ。特に後者の視点は、戴さんの言論の中で重要なものだと思う。それは大きくいえば反帝反封建ということにもなるのだろうが、そうしたものの具体的なありかたが知りたくて、台湾

新文学運動の研究から始めたわけだ。

では「新文学」とはなにか。それはもちろん中国の文学革命によって起こった新しい文学を指すことばだったわけで、白話文で書かれていることと、社会批判やその改革へ向けての啓蒙精神を内包することを条件とし、中国ナショナリズムを背景とするものだったといえよう。したがって西欧の文学の文言文による翻訳は、中国近代文学とはいっても、中国新文学とはいえないし、鴛鴦蝴蝶派の作品は白話文で書かれていても、啓蒙精神をふくまないことによって、近代文学ではあっても、新文学とはいえないということになるろう。

台湾新文学運動はこうした中国新文学運動の刺激を受けて、その精神を台湾に生かそうとするものだった。啓蒙精神は植民地支配への抵抗と、支配を許している台湾の社会、思想の変革として受け取られた。また『台湾民報』（『台湾新民報』）を中心に中国新文学の紹介や白話文による創作も始まった。だがこのころの青年たちは日本語で教育を受け、日本語が思想、文学の入口だったし、中国語は陰に陽に弾圧されたから、30年代には日本語による投稿のほうが白話文によるものより多かったという。また新文学運動は文言文を否定し白話文を主張するところから始まったのだが、たとえば樂社の詩人たちのように日本への抵抗を秘めているものである限り、排除の対象とはならなかったのではないか。さらに30年代には台湾語で書こうとする運動もあり、また教会ローマ字による台湾語の媒体『台湾教会報』（『台湾教会公報』）も存在した。だから台湾新文学運動とは中国新文学運動の刺激を受け、これに合流していこうとする傾きをも持っていたが、同時にそこには白話文のみならず、日本語、文言文、台湾語などさまざまな言語、文体を含むものだったといえよう。そしてそこにはこうした複雑さをふくめて、台湾意識の原基的な形が現れてきているように思う。

国民党時代にもこの新文学運動を保存し、受け継ごうとする努力があった。台湾人が正式に台湾研究を行える数少ない場が各文献委員会だったのだが、そのうちの台北市文献委員会の機関誌『台北文物』での二度にわたる「新文学・新劇運動専号」の特集（第三卷第二期、三期、1954年8月、12月）は、いまでも研究のための基本文献といえよう。また陳千武が台湾の現代詩について、「横の移植」（紀弦ら外省人詩人の刺激）とともに「縦の継承」（日本時代からの詩作の伝統）を主張したことや、呉濁流、張文環、黄靈芝、陳千武らの日本語による創作も考え合わせられる。さらに60年代ごろから台湾人の文学の場を作ろうとする動きも始まった。メディアの多くの部分が外省人に占められていたことや、表の舞台で台湾独自の問題や事情を描くことが困難だったことによる。鍾肇政、鍾理和らの活動や、鍾肇政による『本省籍作家作品選集』10巻（文壇社、1965年）の刊行、呉濁流による『台湾文芸』の創刊（1964年）、呉瀛濤、陳千武、白萩、趙天儀らによる『笠』の創刊（1964年）などである。台湾人のための独自の場を作ろうとする努力は、日本時代の新文学運動とパラレルな関係にあり、その台湾意識のありかたを引き継ぐものだったといえよう。

だがこうした動きは一般に知られていなかったわけではない。70年代台湾からの留学生のほとんどが呉濁流や楊逵の名を知らなかったことが思いだされる。こうしたものが広く世に知られるようになっていったのは、70年代からの民主化運動の進展によってだった。民主化運動の大きな柱

の一つであった『大学雑誌』に陳少廷の「台湾新文学運動簡史」が連載され、後に単行された（『台湾新文学運動簡史』聯経出版事業公司、1977年）のがよい例である。『大学雑誌』は運動の範型として五四運動をひとつのモデルとしていたように見えるが、そうしたことをふくめて日本時代の抵抗の歴史と啓蒙精神とが、拠るべき基盤のひとつとして再発見、再評価されたのだと思う。

またこれと平行して60年代後半ころから、台湾社会を批判的に描こうとする新しい世代の作家たちが現れ、郷土文学と呼ばれるようになった。そこに描かれた郷土とは、経済発展によって破壊されていくものとしての郷土であり、また国民党によって奪われたものとしての郷土でもあったから、それは民主化運動と呼応しつつ、その中で日本時代の新文学運動やその継承の努力を発見し、それを受け継ごうとしていったように思う。杜撰ないいかたになるのを承知でいえば、啓蒙精神と台湾意識とが合流していったわけで、その過程で台湾意識の内容も変化していった。

台湾新文学、本省籍作家の文学、本地作家の文学（劉紹銘編『本地作家小説選集』大地出版社、1976年。「郷土文学」のアンソロジー）、郷土文学などさまざまに呼ばれ、それぞれ限定された内容だったものが、やがて台湾文学という名辞に集約され、清朝時代から現代までを一貫するものとして把握されるようになっていった。そうした転換点を例示するとすれば、李喬「台湾文学正解」（『台湾文芸』八三期、1983年7月）などだろうか。それはもちろん新しい枠組みの近代国民国家の共同性に見合うものとしての台湾意識の内容が自覚化されていくプロセスでもあったのだと思う。こうしたプロセスをリアルタイムで見ることができたのはたいへん幸運なことだったと思う。